

感 傷 的 保 護 論

自然界にとって、外部からもたらされる人為的な影響は、たとえそれが人間によつてどのような命題を与えられようとも、しよせんは、侵すものと侵されるものとの立場にわかれるに違いない。人間とはまったく勝手なものである。

われわれがたずさわる林業経営に例をとつてみても、この狭い国土にひしめく日本人の立場からすれば、限りある森林資源をできるだけ温存し、その自然環境を守るためには、必要な木材資源はなるべく外材に依存しよう、と考えるのも当然のこととなる。しかし、新聞などでも伝えられるように、あの広大な国土と資源を擁するカナダでさえも、森林資源の急速な減少には応じられない、とする議論が盛りあがっているという。立場を変えてみると、これまた無理からぬことではある。

自然景観を例にとつてみると、内地府県の自然というものは、すでに開発や都市のスプロールが進みすぎて、もう、いまさらとり返しもつかないような状態であるからそれを前者のテツとして、せめてわが北海道だけはそのような誤ちをくり返さぬように、というのが自然保護をすすめる人々の共通の目標であろう。だがこのような考え方は、観光企業や地元各市町村からいわせると、もつとも排撃すべき狭い意見という

ことになるのである。

いま「文芸春秋」に新田次郎氏が連載中の小説「霧の子孫たち」は、長野県の霧ヶ峯高原を舞台として、自然保護と観光開発を正面からとりあげている。いわゆる文化人や知識層に自然保護論者が多いことは、周知のとおりである。それはなにも、身勝手な自己中心の議論ではないのであつて、一般の人よりも先の見透しを持つているために、悪化する自然環境の保全を真剣に希うからなのであろう。前述の新田氏の作品は、その意味でまことに貴重な自然保護読本だと思ふのである。

その新田氏は、昨年十一月号の「文芸春秋」にも、「昭和新山」の力作をものしている。吉川英治賞の三松老を、感動的に描出した筆の冴えは流石であつて、この一篇によつて昭和新山に対する世の人々の認識を、いよいよ新たににしたに違いないと思ふのである。

△昭和新山Vの背後に奇怪なドームを支える有珠山には、ロープウェイがかけられているが「——昭和新山取材中にもっとも不愉快に感じたものは、あの自然を破壊してつくりあげたケーブルでした。北海道だけでなく日本中いたるところああいうものができて、困ったものだと思つています」

という新田氏からの葉書をいただいたときは、冷汗とともに忘れることのできないシヨツクとなつて、その後に残つている。

たしかに一般的にみて、自然景観を破壊する最たるものは道路とロープウェイ、リゾートなどであることは間違いない。それでも北海道の自然公園は、まだその九〇パーセント近くを国有林によつて占められているから、まだこの程度の自然破壊で済んでいるのだが、民有地の比率の多い本州府県の自然公園の、保護の困難さは想像にあまりあるものがある。しかしその国有林すらも最近では、奥地林開発のための林道が、いたるところに網の目のように広がつてきている。保安林といえども例外ではない。

そしてなによりも問題なのは、これらの林道が、その本来の目的である森林の収穫や保護管理とはまったく縁のない、大量の観光人口流入のルートとして一変してしまふ現実である。国有林といえども、特別会計である以上は、採算のとれない経営はあり得ない。しかし、適切な保護対策を伴わないこのような道路の伸長は、貴重な自然を荒廃させる以外にはない。

これを裏つづけるかのように、最近たまたま目を通してみた「林野時報」の目次の中に「観光開発は国有林の使命」なる一文をみて、とうとう来たかと愕然となつたので



ある。とにかく、このような開発の波に対処するには、自然公園はあまりにも無力である。保護一辺倒で、他の利用や開発には一顧も与えない、というような行政はもろん当を得ていないが、広い視野でみて、

なにが後世の仕合わせにつながるか軽卒な判断は許されない。しかし、要するに全体としてバランスのとれた保護と発展、それがこれからすすむべき道標なのであろう。

いま、われわれが急いで実行しなければならぬことは、このような道内に残されている貴重な自然環境を、自然公園として拾いあげ保存する作業である。△日高山脈▽△狩場山▽△サロベツ原野▽△釧路湿原▽△原始河川▽等々、課題は山積している。このうち△日高山脈▽については、一昨年から学術調査を自然保護協会に委託して調査をすすめ、本年度は公園計画策定のため現地を調査している。

日高でふと思いついたことは、もう五、六年前のこと、日高山脈を自然公園に指定してほしいという地元運動がはじまり、たまたま当時の地元のある人たちが熱心であり、△日高山脈▽を△北海アルプス▽と名付けて売り出そうとの報道がなされた。

これは、当然のことにたちまち世論の箱烈な反対をうけ、その案は引つめたのであ

った。もともとこの人たちとしては、軽い気持ちで自分のアイディアを披露した心理だったのであろうが、とんだところで、俗人の思慮の浅さを暴露してしまったことになった。

私ごとで恐縮であるが、一昨年小句集を出した際に、私は△日高▽というタイトルを選んだが、これはかつて帯広に在住していた当時、朝夕市街の涯に光り輝やく日高連峰を垣間見て、重く沈んだ道東の風土に魅せられたためではあるが、それ以上に、△日高▽という固有名詞そのものに、深い愛着をもったからである。だから△日高山脈▽を△北海アルプス▽に変えようなどという俗論に、地元の人々が憤りを覚えたことは、あまりにも当然であると私は理解できたのである。

ところで百科辞典を索いてみれば、日高という町が北海道をふくめて全国に四つもあることに、私はいささか驚ろかされた。過日、日高山脈調査のため日高町を訪ずれた際、町長に日高の語源についてお尋ねしてみたが、やはり要領を得る説明はなかった。日高という意味については、いざれ識者に教えを乞う機会もあろうかと思うが、それにしても△日高▽というのは、じつに魅力的なよい名前であると私はひそかに考えている。

ともかくこれは、ただ一つの例に過ぎないかも知れぬが、その土地に冠せられた古来の名称は、そこに住む人々にとっては風土の一部、己が肉体の一部とも考えられるほど強い愛着があるに違いない。ここで北海道全体の開拓史をふりかえってみると、先住民としてのアイヌ族はほろび、征服者としての日本人が切り開いた歴史である。

いつも私が考えることは、洋の東西を問わず、征服者は被征服者に、つねに自己の歴史を押しつけていることである。朝鮮を、台湾を、満州を、そしてわが北海道をである。

自然児である彼らアイヌが捧げた聖なる地名は、一片の反古のように抹殺され、愚にもつかない意識や当字の地名が氾濫している。それはすべて、アイヌからわれわれの先達が奪ったものである。そこで、北海道の自然保護について考えることは、その第一歩として、すべての和名を返上し、すべからく往古のアイヌ名に戻ることからはじまるべきである。その意味で数年前、後志管内の狩太町がニセコ町となった例があり、また、襟裳岬で有名な幌泉町は、十月から「えりも町」に改名することとなったのは、その動機はともかくとして、ユニークな発想であり、理事者と町民の英断に惜しみない拍手をお送りしたい。

(北海道林務部林政課・自然公園計画係長)